

## 特養古江台ホールで餅つきボランティア

年の瀬の押し詰まった12月27日午後、わかばの会員13名(男性6名、女性7名)が特別養護老人ホーム古江台ホールでの餅つきボランティアに参加しました。作業衣に着替え、ケアハウスから始めて屋内の3箇所を順次回り、フロア毎に出前。入居者の皆さんの掛け声でわかばの会員男性が餅つき、最後には入居者の皆さんも軽い杵で仕上げの餅つき、仕上がった餅は入居者と女性会員が小餅に丸めて完成。



昔を思い出したとのお話、楽しい笑顔が大変印象的でした。またこれでお正月が来ますねとのひと言もいただきました。午後3時過ぎに終了、控え室に戻り施設長より感謝の言葉と古江台ホールの概要、施設長の設立時の思い等パワーポイントで説明を頂き、つき立てのお餅にあんこや、おろし大根、きなこを付けてご馳走になりました。

会員の皆さん、ご多忙中参加頂き大変ありがとうございました。(木村良三)

## ナルクの仲間に加わらせていただいて

私は5人兄妹の長女として育ちました。忙しい母に代わって妹の世話をするのは当然のことでした。また父は手伝いをする私を上手におだて褒めてくれました。それがとっても嬉しかったのを覚えています。

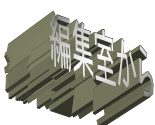


少しのお手伝いで誰かのお役に立てることは、美德でもなく誰よりも自分自身の喜びだと認識していましたので、ボランティアという言葉に少し面映い気持ちを抱いていました。

今更ながらですが、ボランティアを辞書で引くと《志願者、奉仕者、自ら進んで社会事業などに無償で参加する人》とあります。世間的にはボランティア活動は、人のために無償で尽くすとして立派なことと捉えられがちですが、私は「喜びという報酬を貰っており、またナルクでは将来の自分のための時間預託をしているのだから・・・」と心の中で開き直っています。

生きがい・助け合い・自立・奉仕、ナルクの理念はそんな私の気持ちに伝えてくれます。実は主人亡き後の10年の間、いつも私に寄り添い癒してくれた愛犬が、昨年可愛い笑顔のまま主人の許に旅立ちました。何の前触れもなく、あまりに突然なことでしたので、健康だけが取柄の私がストレスで20数年ぶりに体調を崩しました。が、家族や友人そして仲間に加わらせていただいたナルクの方からお声をかけていただき、新しい絆を結ぶことが出来、お陰様で元気を取り戻しました。

今は豊泉家のウェルカムドリンクサービスと、お一人住まいのご年配宅のお掃除、事務所でのパソコン入力など、ささやかながらお手伝いさせていただいております。いつも楽しくアツと言う間に時間が過ぎ、逆に元気をもらって帰ります。今年も元気に活動に参加できればと願っております。(服部節子)



久しぶりに娘の顔をみたいと、正月に九州まで旅行した。体調を考えるなら、家で気楽にしていた方がよいのだが、どうにもしがたい小人のサガである。だがいざ出かけるとなると、持ち物などの準備に自信がない。ちょっと前にこしらえたメモを思いだし、その通りに鞆に詰め込んだ。だが娘の家に着いたその夜、気がつく寝巻をいれるのを忘れていた。ていねいに書いたメモだったが、中身に抜かりがあるから頼りにならない。今回もおのれが信用のできないのを再認識させられた。(奥野享)